

村上範致と著述古記録に関する基礎研究

鵜飼尚代 佐久間 永子

一 はじめに

幕末、田原藩に村上範致(のりむね)〔文化五年（一八〇八）—明治五年（一八七二）〕なる藩士がいた。幼名は喜之助、字は定平、諱は初め貞輔、のち範致、号は清谷という。のち定平を息照に譲り、財右衛門を襲名している。村上範致は下級藩士から身を起こし家老まで出世した。田原藩は藩主三宅家を擁する小藩（一万二千石程度）であったが、渡辺崋山⁽¹⁾を輩出するような気概もあった。範致は崋山の期待を背負い、崋山亡き後、田原藩のみならず日本の海防の担い手として成長していった人物である。範致が遺した「安政乙卯聞見雑録二」「安政丙辰聞見雑記三」「安政四丁巳聞見雑記四」「安政五戊午聞見雑記五」「安政六己未聞見雑記六」「万延元庚申聞見雑録七」「文久元辛酉聞見雑録八」「慶応四丁卯冬聞見録」（以後、上記八冊を総称して本稿では「村上範致聞見雑記」という）には海防に関することを中心に、日本各地の情報収められており、藩を越えて日本の行方を模索する範致の姿が見えてくる。

平成二十八年（二〇一六）十月、佐久間永子が中心になり、鶴飼尚代が補佐する形で古文書研究会を立ち上げた。研究会の目的は、村上範致の「村上範致聞見雑記」を読み進め、収集した情報から幕末の日本の実態、それを見る範致の視点や見解を分析して、幕末という時代の転換点における範致の位置づけを明確にすることにある。この研究会を「村上範致古記録研究会」と命名し、毎月一回輪読という形で読み進めている。

本稿は、研究会の成果を発表するに先立ち、基本事項として村上範致と「村上範致聞見雑記」について概要を明らかにすることを目的とする。そこで、村上範致については村上家系譜、範致の事績や交友関係、範致関係史料、「村上範致聞見雑記」については書誌事項と内容（各冊目次項目）を、一次史料や先行研究、田原市博物館の整理データに基づきまとめた。

村上範致の一次史料としては、村上家から田原町博物館⁽²⁾に寄贈され、現在田原市博物館に所蔵されているものと、さらに渡辺華山からの書簡など、数は多くないが書簡も残る【表2】。また、藩日記にも村上範致の名はしばしば登場する。しかし、先行研究としては管見の及ぶかぎり『田原史』⁽³⁾『田原町史 中巻』⁽⁴⁾と『田原町博物館年報』第五号⁽⁵⁾の三点で、範致の事績に焦点を絞った研究は少ない。本稿では、これらに基づき村上家の系図、範致の略年表を作成し、書簡に限定して交友関係をまとめた。

「村上範致聞見雑記」の内容については、各冊の目次項目を順を追って並べ、範致の注意が向かった対象を示すことにした。目次項目を挙げるにあたっては、田原市博物館から拝借した「村上範致聞見雑記」翻刻案を参考にさせていた。目次項目一覧を作成することにより「村上範致聞見雑記」が大いに利用しやすくなることも期待できよう。

二 村上範致について

二一 村上氏について

まずは村上氏の来歴を紹介する。

『田原町史 中巻』によると、村上氏は、「祖村上理右衛門は三河拳母梅カ坪の出身。その子柳元病身にて領内赤羽村で医師を営む。柳元の子照寿、三宅康雄侯に仕えて藩士となる」⁽⁶⁾とある。『田原町史 中巻』「由緒」⁽⁷⁾および聞き取りを基にその後も含めて系譜をまとめた。

正徳三年五月初出仕

寛延四年十月家督相続

天明六年九月家督相続

寛政二年六月家督相続

文政十年家督相続

村上財右衛門照寿

—

照尚

—

照乘

—

照員

—

範致

—

(孝)

照武

—

興之助

—

俊吉

—

正敏

※『田原町史 中巻』所収「村上家系図」には、「村上財右衛門照寿正徳五年（一七一三）五月初出仕」とあるが、村上家の「由緒」には、「正徳三年癸巳」と記載されており、本稿ではこちらを採用した。

範致は田原藩士として五代目を襲ったことになるが、村上家は藩士の家系として決して長い実績があるわけではなかった。

二二 村上範致について

村上範致は、文化五年（一八〇八）に田原藩山浜代官十七俵二人扶持村上財右衛門照員の長男として田原に生まれた。

徒士格の出身ながら家老まで出世し、明治に入ってから大参事に就任している。

以下に範致の略歴を『田原町史 中巻』の本文記事や掲載史料、年譜⁽⁸⁾を基にまとめ、時代背景がわかるよう日本史関連事項も附した。

【表1】

和 歴	西 暦	年 齢	事 項	参 考 (日本政治・外交)
文化五年	一八〇八	1	7/11 田原藩山浜代官十七俵二人扶持村上財右衛門照員の長男として田原に生まれる	一八〇四年 ロシア使レザノフ長崎に來り通商要求
文政十年	一八二七	20	1/30 父の隠居により家督相続、高二十三俵二人扶持御供中小姓 三宅友信の近習	一八〇八年 江戸湾沿岸に砲台修築起工 間宮林藏樺太を探検し、間宮海峡を発見 イギリス船フェートン号長崎に來航
文政十二年	一八二九	22	11/11 下目付役 結婚 三宅康直近習	一八二三年 シーボルト(ドイツ人・オランダ商館員)來朝
天保元年	一八三〇	23	3/23 当分の内刀番 日光祭祀供(日光祭祀奉行三宅康直) 中小姓格 代官役	一八二五年 異国船打払い令
天保二年	一八三一	24	2/24 病氣につき代官役御免	一八二八年 シーボルト事件
天保三年	一八三二	25	3/26 男子出生 中小姓	
天保四年	一八三三	26	5/24 鳳来寺普請添奉行 江戸へ出立、飯田町齋藤弥九郎道場へ入門、無念流剣術修行	

和歴	西歴	年齢	事項	参考 (日本政治・外交)
天保五年	一八三四	27	無念流剣術師範杉山大助に師事 (田原藩に杉山大助を招く)	一八三四年 水野忠邦老中となる
天保六年	一八三五	28	江戸一カ年詰、剣術修行 男子出生 6/4 7/3 8/20 自分の内馬場先門番所勤番 刀番、江戸御家中子供槍、剣術世話方	
天保七年	一八三六	29	叔父仁兵衛義麴町貝坂高野長英養子に差出し許可 6/25 12/2より翌年1/29まで田原にて下目付仮役	
天保八年	一八三七	30	家中若年者取締役 7/9	一八三七年 大塩平八郎の乱
天保九年	一八三八	31	給人格 1/11 閏4/15 鎌倉へ出張、井上佐太夫の大筒稽古を見学 6/11より6/16日まで目付役	徳川家慶將軍宣下 アメリカ船モリソン号漂流を伴い浦賀へ入港
天保十年	一八三九	32	2月 内用にて江戸出府 2/29より5/25まで巢鴨邸友信の納戸役助勤 7月上旬帰郷 7/26 大坂加番供一カ年詰出立	一八三九年 蛮社の獄、渡辺華山・高野長英投獄される
天保十一年	一八四〇	33	8/15 大坂加番終り、帰藩 11/25 二俣加増五俵足高計三十俵二人扶持、給人番方	一八四〇年 華山、田原池ノ原屋敷に蟄居
天保十二年	一八四一	34	1/11 成章館係 3月 出府し、高島秋帆に師事し砲術修行 5/9 武州徳丸原における西洋砲術公開演習に参加 5/12 男子出生 6/30 江戸出立、帰藩	一八四一年 華山池ノ原屋敷にて自刃

和 歴	西 暦	年 齢	事 項	参 考 (日本政治・外交)
天保十三年	一八四二	35	5月 高島流砲術再修学のため長崎へ留学 9/16 帰藩 12/3 矢部沢にて初めて大砲鑄造に成功	一八四三年 水野忠邦失脚 阿部正弘老中主席になる
天保十四年	一八四三	36	1/11 給人番入 1/19 高島流銃陣砲術を藩主の上覧に供す 4月、5月の二回にわたり藩主康保に高島流砲術を免許 「銃陣初学鈔」を著す	一八四四年 フランス船琉球に来航
弘化元年	一八四四	37	2/30 荻野流砲術を脱退 成章館芸事振興役就任 三俵加増計三十三俵二人扶持、使番格	一八四六年 幕府外船来航を奏上
弘化二年	一八四五	38		
弘化三年	一八四六	39	6/26、27 異国船表浜へ出現、海岸防衛に出陣	
嘉永二年	一八四九	42	5/16 息周助江戸修行中に病死	一八四九年 イギリス船浦賀に来航
嘉永三年	一八五〇	43	3/22 男子出生 5/5 田原藩軍制を西洋流に改革 7/20 掛川藩へ砲術指導に出張 11月 藩に農兵新組を組織編制	一八五二年 ロシア船下田に来航
嘉永四年	一八五一	44	12/21 父友甫(照員)死去	一八五三年 米使ベリール浦賀来航 徳川家定將軍宣下
嘉永五年	一八五二	45	1/11 使番役に進む	
嘉永六年	一八五三	46	3月 藩に野戦筒組を組織編制 8/27 掛川藩へ砲術指導に出張 9/3 帰藩	一八五四年 日米和親条約締結 日英、日露、和親条約締結
安政元年	一八五四	47	1/16 長柄奉行格、側取次 3/27 海岸防禦対異国船軍事専門係 5/25 大坂加番供二カ月詰	

和歴	西歴	年齢	事項	参考(日本政治・外交)
安政三年	一八五六	49	正月 「漂民聞書」完成(菅生郁蔵、稲熊徳蔵らと) 五俵加増十俵足高計四十五俵、側用人仮役 江戸出府 江戸出府 帰藩 大目付仮役	一八五五年 幕府長崎海軍伝習所開設 堀田正睦老中となる
安政四年	一八五七	50	君沢型造船差配 娘を真木矢柄の妻に縁組許可 側用人手判係	一八五六年 米総領事ハリス下田駐在
安政五年	一八五八	51	江戸詰にて出府 高八十石 年寄末席に進む	一八五八年 井伊直弼大老に就任 日米修好通商条約調印 徳川家茂將軍宣下
安政六年	一八五九	52	加増二十石役料二十石計百二十石、年寄役、江戸引越し 御朱印守護にて江戸より田原着 家族同伴江戸へ引越し	一八五九年 安政の大獄
文久二年	一八六二	55	息定平とともに幕府講武所高島流砲術世話役就任 江戸より大坂表へ出向	一八六〇年 桜田門外の変
文久三年	一八六三	56	大坂康直に従い立帰り田原へ出向 内用にて田原へ出向 勝手用向にて大坂へ出張 息定平吉田藩士遊佐当馬の妹と結婚	一八六二年 生麦事件 一八六三年 薩英戦争
元治元年	一八六四	57	二女と三浦平馬との結婚を許可 藩主康保の参勤出府の後乗役	
慶応元年	一八六五	58	大坂へ出立 帰藩	

和 歴	西 暦	年 齢	事 項	参 考 (日本政治・外交)
慶応三年	一八六七	60	11/3 急用召にて江戸へ出立 11/16 同席大名使者として京都へ出向、將軍慶喜へ上書奉呈	一八六七年 大政奉還 王政復古の大号令
明治元年	一八六八	61	2/24 康保田原帰城の後乗役 10/17 田原藩一等官、事務局兼会計局長に就任	一八六八年 明治維新 江戸城明渡
明治二年	一八六九	62	2/27 藩治職制実施により、一等官執政 11/24 執政職廃せられ、大参事 12/29 公命により、致と改名	藩治職制 一八六九年 版籍奉還
明治三年	一八七〇	63	3/4 大参事集会のため豊橋へ出張 9/13 大阪へ出張 10/17 帰藩 12/20 東京へ出立	一八七一年 廢藩置県
明治四年	一八七一	64	7/17 東京より田原へ着	
明治五年	一八七二	65	4/16 田原にて病没	
大正二年	一九一三		11/17 従五位に叙せられる	

※日本史関連項目は、『日本史総合年表 第二版』（加藤友康他編、吉川弘文館、二〇〇五）、および『日本史年表・地図』（児玉幸多編、吉川弘文館、一九九五）を参考にした。

範致は、父親の隠居により、家督を相続する。相続してから、明治までの石高・職位は以下のとおりである。

文政十年（一八二七） 高二十三俵二人扶持御供中小姓

天保十一年（一八四〇） 二俵加増五俵足高計三〇俵二人扶持、給人番方

弘化元年（一八四四） 三俵加増計三十三俵二人扶持、使番格

弘化二年（一八四五） 成章館学校係、劍術、砲術指南、槍術世話役となる

嘉永五年（一八五二） 使番役に進む

安政三年（一八五六） 五俵加増十俵足高計四十五俵、側用人仮役、のち大目付仮役

安政五年（一八五八） 高八〇石 年寄末席に進む

安政六年（一八五九） 加増二〇石役料二〇石計百二〇石、年寄役（筆頭家老）

明治元年（一八六八） 田原藩一等官、事務局兼会計局長

明治二年（一八六九） 藩治職制実施により一等官執政、のち執政職廢せられ大参事

家督相続の二〇歳の時点では、二十三俵二人扶持、御供中小姓であったが、維新の頃の五十二歳当時、高百二〇石の年寄役（筆頭家老）となり、藩のトップまで昇りつめたのである。

範致は、武芸・軍事に長けた人物であった。以下、『田原町史 中巻』を基に武芸・軍事との関わりをまとめた。⁽⁹⁾ 田原藩の御家流剣法は直心流であったが、範致は天保四年（一八三三）江戸飯田町斎藤弥九郎道場へ入門し、無念流を学ぶ。田原においては無念流の師範杉山大助に師事し、自宅の門の脇へ武芸稽古所を取り建てるとほど熱心であった。天保八年（一八三七）無念流は、成章館剣術部門に正課として編入された。

範致は特に砲術家として名高い。はじめ藩の流派である荻野流を学ぶが、三宅友信⁽¹⁰⁾の影響を受け、西洋兵学を学ぶようになる。天保十二年（一八四一）出府し、高島秋帆⁽¹¹⁾に師事して砲術を学び、秋帆が武州徳丸原で開催した西洋砲術公開演習にも参加した。天保十三年（一八四二）高島流砲術再修学のため長崎へ留学し、翌年には、高島流銃陣砲術を藩主の上覧に供するまでになり、ついには藩の砲術の流派を荻野流砲術から西洋砲術へ変更したのである。

更には、他藩への貢献も注目すべき点であろう。掛川藩への指導も複数あるが、秋帆の蟄居により、高島流の砲術の伝授は範致が担うこととなったのである。以後田原の村上邸に、仙台、水戸、姫路などから高島流砲術を学ぶために来

た留学生が寄宿したという。

範致は、このように西洋砲術家として名高く、文久二年（一八六二）息子の定平とともに幕府講武所高島流砲術世話役に就任し、江戸幕府にも重用された。

二一三 書簡に見る村上範致

村上範致の人間関係は略年譜中からも垣間見られるが、ここでは書簡から具体的に範致の人間関係、その人となりを見てみたい。取り上げる書簡は、別所興一訳注『渡辺崋山書簡集』、『崋山全集』に収録されたもので、古いものから以下の順に見ていきたい。

- ① 渡辺崋山から真木定前¹²⁾への書簡〔天保七年（一八三六）？月五日〕
- ② 渡辺崋山から真木定前への書簡〔天保九年（一八三八）七月七日〕
- ③ 渡辺崋山から真木定前への書簡〔天保十年（一八三九）三月十八日〕
- ④ 渡辺崋山から村上範致への書簡〔天保十二年（一八四一）五月十八日〕
- ⑤ 渡辺崋山から村上範致への書簡〔天保十二年十月十日〕
- ⑥ 鈴木春山¹³⁾から村上範致への書簡〔？年四月二十四日〕

※田原市博物館には村上氏から寄贈された「書状」も残るが、傷みがはげしく修復を待つて解読することになる。

① 渡辺崋山から真木定前への書簡¹⁴⁾〔天保七年（一八三六）？月五日〕

西洋流銃陣を田原藩に導入するため、具体的にどのような準備をしているかが主な内容で、当時、崋山は江戸家老で四十四歳、定前（字は半助）は用人で四十歳、範致（字は定平）は刀番で二十九歳であった。定前は、範致の母の父（生

田何右衛門)の実弟にあたる。

書簡中に「半助ドノ定平兩人へ皆伝の調に御座候」とあり、定前と範致が高鳥流の免許皆伝を受けるべく、華山が動いていたことがわかる。

また、「水府の新本二冊とも写取申候。テツポー製造迄くはしく有之候。いづれ半助どの定平兩人を目当に御座候。」とあり、華山が西洋流銃陣についてさまざまな情報を収集し、定前・範致に軍事の専門知識を付けさせようとしていることがわかる。

② 渡辺華山から真木定前への書簡⁽¹⁵⁾〔天保九年(一八三八)七月七日〕

華山が田原藩の最高責任者(上頭)になればと願う定前に、それは自分の本意ではないと伝え、定前自身のあり方を助言する内容。華山は江戸家老で四十六歳。定前は用人で四十二歳。範致は家中若年者取締役で三十一歳。

その中に、「春山芸学ばかりにて上ヲ不顧、見かぎり不申様、定平氣(機)先ヲくちかぬ様、式右衛門ガ世風に流れぬ様」とあり、優秀な部下を扱う上での注意点も助言する。範致に対しては、他に先んじて事をおこそうとするその姿勢を潰さないようにしてもらいたいという。華山は範致を「機先」となり得る人物と評価していたようだ。

③ 渡辺華山から真木定前への書簡⁽¹⁶⁾〔天保十年(一八三九)三月十八日〕

華山が、伊藤鳳山から藩校(成章館)運営の基本方針をどうするか、範致に伝えてほしいと言ってきたと、定前に伝えている。華山は江戸家老で四十七歳、定前は用人で四十三歳、範致は巢鴨邸友信の納戸役助勤で三十二歳。ただし、この書簡の要件は他にもある。

伊藤鳳山は、藩校設立の目的は、「王者之師」か「童蒙之師」か、どちらにあるのかを訊いている。華山はどちらに

するかを決めなくては動きにくいとしても、時世が時世だけに、バランスを取りながら両方をやっていかなければならないという、自分の姿勢も伝えている。範致が成章館の運営に大きく関わっていたこと、崋山の意向を代弁する役割を担っていた可能性もあることがわかる。

④ 渡辺崋山から村上範致への書簡⁽¹⁷⁾〔天保十二年（一八四二）五月十八日〕

崋山は塾居中で四十九歳、範致は給人番方で三十四歳。

村上範致が天保十二年五月、高島秋帆が武蔵徳丸原で主催した西洋式砲術の実演訓練に参加したことを、崋山は高く評価している。崋山は大砲こそ「扞城の神器」だとし、今後さらに重要性が増すので、実演訓練に参加した者は大砲を準備することの重要性を主張せよ、と言う。

この書簡の中で、崋山は大砲を準備することを範致と真木定前との内々の交渉で進めるのではなく、他人がいる前で真木に直談判せよ、少々強硬な姿勢で真木を困惑させるぐらいでもよいと、具体的な助言をしている。大砲が重要だとする見解を、藩全体で共有したいという崋山の策であった。身動きの取れない崋山が、自身の考えを範致に託して実現させようとする、信頼に基づく上下関係が看取できる。

また、今回の演習に参加するという経験を基に、蘭語の兵学書でさらに研鑽を積めば、範致は「海内一」になると太鼓判を押している。今後の兵学には西洋の知識が必要で、兵学について範致を第一人者に育て上げたい、という崋山の思いが込められているよう。

⑤ 渡辺崋山から村上範致への書簡⁽¹⁸⁾〔天保十二年十月十日〕

崋山が関係各位に送った五通の遺書の一。自刃を決意したこと、後に残す家族への支援依頼、真木定前・生田何右衛

門・松岡次郎らへの御札を伝えることの依頼で、短い書簡である。

崋山が強い信頼を範致に対して抱いていたことは確かである。しかし、真木定前に対する以上の信頼を寄せていたとするのは早計で、別所氏は、当時定前は江戸詰で、範致は当時田原詰めで藩政の中樞にいたわけではなかったので、崋山の縁者への取り次ぎが頼みやすかったのではないかと推測している。

⑥ 鈴木春山から村上範致への書簡⁽¹⁹⁾〔?年四月二十四日〕

鈴木春山のもとへ葦山江川県令⁽²⁰⁾から急信で、『フルステケンキユンデ』⁽²¹⁾を拝借したいと言ってきた、というのが書簡の主旨である。おそらく幕府の意向が反映していることと思われ、時世が時世だけに貸してやってほしいと依頼している。追伸で、巢君（三宅友信）には別段連絡していないことを書き添えている。

『フルステケンキユンデ』がどのような書物であるかは不明だが、三宅友信の元にあると予想されていた。それを借りたいという時、まず範致に言ってきたことから、春山と範致の親密さがわかると同時に、友信と範致の親密さもわかる。

以上、①～⑥の書簡から、渡辺崋山が範致の才能を認め、西洋兵学の知識を吸収して兵学の第一人者となることを期待していたこと、崋山の範致に対する信頼は非常に厚かったこと、三宅友信との関係の深さなど、確認できよう。

三 村上範致関係古記録等について

村上範致に関係する資料の多くが田原市博物館に所蔵されている。主なものは村上信子氏から二回に渡り寄贈された

〔物〔表2〕のNo.1～33村上家伝来資料〕で、書籍、書画、書状等である。これらについて同博物館の資料整理データを基に、一覧表を作成した。

【表2】

NO	史料名	執筆者	形態	数量	法量(縦×横cm)	備考
1	由緒	村上財右衛門照員	冊子	1	24.9×17.5	
2	南蛮流油之図 全		冊子	1	17.4×12.4	
3	公儀御変制被仰出候 二付愚按	村上財右衛門範致	冊子	1	24.0×17.0	
4	王政維新後公務履歴	村上照武	冊子	1	24.9×17.1	
5	漢詩集(月下海棠他)		冊子	1	23.5×15.7	
6	従藤左衛門政貞越後守 康信迄三代 御系譜		冊子	1	24.4×16.9	
7	司馬法詳解嚴位第四		冊子	1	24.8×17.4	
8	安政乙卯聞見雑録二	村上範致	冊子	1	23.9×17.5	
9	安政丙辰聞見雑記三	村上範致	冊子	1	24.2×17.6	
10	安政四丁巳聞見雑記四	村上範致	冊子	1	24.2×17.4	
11	安政五戊午聞見雑記五	村上範致	冊子	1	24.1×17.4	
12	安政六己未聞見雑記六	村上範致	冊子	1	24.2×17.6	
13	万延元庚申聞見雑録七	村上範致	冊子	1	23.8×17.0	
14	文久元辛酉聞見雑録八	村上範致	冊子	1	24.1×17.1	
15	慶応四丁卯冬聞見録	村上範致	冊子	1	24.5×17.2	

NO	史料名	執筆者	形態	数量	法量(縦×横[cm])	備考
16	高島流起証盟文		横卷	1	180×615.7	
17	兵法伝授 序		横卷	1	177×88.7	
18	蘭図		掛幅	1	134.7×15.5	
19	竹図		掛幅	1	134.7×15.5	
20	高島流砲術中位伝授		横卷	1	181×179.9	
21	(高島流) 砲術起証文之事		横卷	1	17.6×266.5	
22	(神道無念流) 起証文 前書		横卷	1	181×582.9	
23	書状卷		横卷	2		
24	漢詩冊	高島秋帆	折本	1	321×14.3	
25	水戸藩史有志者より幕府 徳川公へ差出せし歎願書之写		冊子	1	282×19.4	
26	掌記	村上範致	冊子	1	120×17.5	
27	清谷漫録	村上範致	冊子	1	130×17.6	
28	砲術開取書	村上範致	冊子	1	168×12.1	
29	柳営深秘録	村上範致	冊子	3	各140×19.4	
30	先考範致君集録	村上範致	冊子	1	200×14.0	
31	夢之又夢東都御府規則目安雜録	村上範致	冊子	1	197×14.0	
32	日記	村上範致	冊子	1	34.2×12.8	明治五年〜
33	墨竹図 村上定平宛書簡	渡辺崋山	掛幅	1	28.9×34.2 26.2×31.8 26.1×31.7	※寄託

NO	史料名	執筆者	形態	数量	法量(縦×横 cm)	備考
34	高島流村上清谷氏伝銃師備用小録 写本		冊子	1	212×174	砲術門人姓名及上小伝
35	高島流伝書 写本		冊子	1	237×163	
36	御家中系譜惣控		冊子		223×158	五巻に掲載

四 「村上範致聞見雜記」について

四―一 書誌

村上範致の事績を顕彰する目的で、前述の「村上範致古記録研究会」を立ち上げ、徐々に研究成果を発表していきたくと考えている。そこで、「村上範致聞見雜記」に絞って書誌事項をまとめておきたい。

【表3】

タイトル	丁数	一丁行数	和暦(西暦)	書き入れ
安政乙卯聞見雜録二	71丁	ほぼ22行	安政二年(一八五五)	朱書あり
安政丙辰聞見雜記三	80丁	ほぼ24行	安政三年(一八五六)	朱書あり
安政四丁巳聞見雜記四	55丁	ほぼ24行	安政四年(一八五七)	朱書あり
安政五戊午聞見雜記五	55丁	ほぼ24行	安政五年(一八五八)	

安政六己未聞見雜記六	75丁	22～40行	安政六年（一八五九）	
万延元庚申聞見雜録七	133丁	22～42行	万延元年（一八六〇）	朱書あり
文久元辛酉聞見雜録八	43丁	22～41行	文久元年（一八六一）	
慶応四丁卯冬聞見録	55丁	ほぼ18行	慶応四年（一八六八）	

※田原市博物館の村上家資料整理データを基に作成。

四―二 目次項目

「村上範致聞見雜記」の内容を概観するため、目次項目を挙げ一覧にして本稿に掲載することにした。原文には目次が付されていない。したがって、内容の検討を進めることにより目次の書き方も変わる可能性があるため、ここでは「目次項目」としておきたい。「目次項目」は以下の凡例に従って作成した。

〔凡例〕

- 一 「村上範致聞見雜記」に見出しが付されている場合は、その見出しを用いる。
- 一 他者の「咄」、「風聞」「噂」などについては、同時に得た情報であっても情報ごとに目次項目に加える。
- 一 項目の語としては、「村上範致聞見雜記」中の語を用い、長くなりすぎないようにまとめる。
- 一 漢字は常用漢字を用い、現代仮名遣いで表記する。
- 一 目次項目の上に、便宜的に各冊通し番号を付す。

目次項目一覧

安政乙卯聞見雜録二

- | | | | |
|----|-------------------------|----|--------------------|
| 1 | 三代目將軍家光、吹上で剣道上覧 | 17 | 諸家調練段々西洋銃砲陣に成る |
| 2 | 嘉永七年浦賀渡来アメリカ船 | 18 | 英咭喇国船呈崎尹書 |
| 3 | 水戸前中納言の歌(三首) | 19 | 英咭喇版評判記中の片仮名字 |
| 4 | 俄羅斯国書翰和解(二通) | 20 | 黒船中満清人へ筆談問答書 |
| 5 | 中浜万次郎 | 21 | 吉田渋木二子贈墨船提督一書并別啓共 |
| 6 | 三本道具御免 | 22 | 長崎へ渡来蒸気船和蘭船風説書 |
| 7 | 浦賀奉行の高 | 23 | 品川台場新規普請入用積入札 |
| 8 | 南京人崎陽役亭へ差出書 | 24 | 亜墨利加船六艘潮田沖へ乗込 |
| 9 | 東都聖堂内からの文翰抜書 | 25 | 異国船五艘生麦沖に罷在 |
| 10 | 日光門跡使者の口上書(阿部伊勢守へ) | 26 | 相馬大膳亮より申越浦賀来状の写 |
| 12 | 東西蝦夷地・島々一円召上 | 27 | パッテイラ船七艘、品川で測量 |
| 13 | 大坂出入米屋の咄 | 28 | 三奉行、大目付、目付、海防掛り登城 |
| 14 | 佐久間修理の口書 | 29 | 両番二組浜御殿へ詰 |
| 15 | 箱館浜屋八太夫からの書付の写 | 30 | 亜墨利加人へ饗応の覚 |
| 16 | 近藤長四郎支配人松前へ罷越、帰村、物語(九件) | 31 | 嘉永七年御上金高の覚(江戸府内) |
| | | 32 | 安政二年公儀被仰出写(大目付へも) |
| | | 33 | レビソン(人名)ヤツパン(日本)拔萃 |

- 34 イギリス船乗組日本人通弁乙吉
- 35 梵鐘鑄換心得方
- 36 諸宗触頭共へ諭書写
- 37 魯西亞使節フーチャチンと川路氏応対の抜書写
- 38 安政二年八月御達
- 39 漂民の一件抜萃
- 40 和蘭陀国王よりの書簡和解并副書写
- 41 かびたんへ諭書写
- 42 条約
- 43 浦触書の写
- 安政丙辰聞見雜記三
- 1 遐邇貫珍(第5号) 抜萃
- 2 安井忠平「鬼神論」
- 3 読海国図志
- 4 蝦夷地開墾の事
- 5 松前侯の石高増加
- 6 長崎における細事变革
- 7 下田港海中に印
- 8 鳳来寺の狒狒
- 9 太田魯三郎地震前見の説
- 10 伊豆七島
- 11 浦触書の写
- 12 同写
- 13 坂倉銀之助長崎帰り咄
- 14 清国当節平穩、職将朱子和睦
- 15 昨年長崎港へ南亞墨利加船来港
- 16 長崎小嶋村辺で諸葉製葉
- 17 藤井静有定「口宮遺聞」
- 18 田原藩医伊藤讓から箱館鎮台執事へ上言
- 19 粵匪大略(附案)
- 20 範致の書翰5通
- 21 丙辰箱館風説(八件)
- 22 赤羽根村より差出浦触写(二件)
- 23 下田奉行へ米利人述懐
- 24 蝦夷人表向服
- 25 海岸備え

- 26 松平定信伊勢路で染筆
- 27 或人の書ける文
- 28 美濃の読人知ず
- 29 心の僻み
- 30 覚悟ある人
- 31 立花龍虎斎の教え
- 32 黒田如水に借金
- 33 板倉周防守京都所司代御免
- 34 経学歌仙
- 35 丁巳江戸評判閣老刀刃目利
- 36 信州の旋風と雹
- 37 大草村漁獵の網中の蛇
- 38 英吉利人と南部侯臣との争論
- 39 英吉利人は気荒
- 40 松岡書状に、アメリカカ船コンシル呈書
- 41 稲石良七の咄に、払郎察船十艘下田へ参
- 42 伊藤春卷の咄に、人形人参
- 43 山静の咄に、藤左衛門乗候スクネール
- 44 蠟燭の製法
- 45 櫛（ハシ）の植え方
- 46 英国使節願の筋
- 47 南部の門番英人に打殺さる
- 48 魯西亜船船底の長角鉄
- 49 桂小五郎への手紙
- 50 箱館にて英船より三、四十人上陸
- 51 大目付土岐丹波守らの長崎出張
- 52 蒸気フレガット船コンシユルへ応接
- 53 英国船四艘入津
- 54 鼠山調練にて松平河内守嫡子薩州陣宮へ御入
- 55 長崎へ英人上陸、暴行
- 56 英吉利船老艘長崎へ立戻る
- 57 鰻屋で両人の若者、御家人の隠居を害す
- 58 駒ヶ嶽の吹抜け
- 59 下田へ異船二艘着
- 60 長崎渡来英船応接の儀不容易
- 61 鼠山調練の見物
- 62 弘国人申、墨夷卑劣の致方
- 63 常総辺の鄙語

- 64 老中堀田備中守異人掛り取計い
- 65 薩州侯直に銃陣指揮
- 66 下田渡来の魯西亞応接
- 67 魯西亞ヒツチンゼル英吉利へ囚われ長崎へ
- 68 浅間嶽出烟
- 69 アメリカ人トウンハルリス申立
- 70 講武所へ被仰渡写(附・添え書き)
- 71 丙辰冬初紀聞(七件)
- 72 下田来港の魯西亞船壹艘は戸田にて出来
- 73 外国貿易惣掛り
- 74 唐太島巡検使参
- 75 一向宗の僧蝦夷住願
- 安政四丁巳聞見雜記四
- 1 蝦夷地の情況
- 2 英吉人と広東人との争論
- 3 公儀注文の捻仕掛蒸気船長崎へ渡来
- 4 捻仕掛蒸気船の価
- 5 阿州公製造のスクネール船
- 6 数紙を重ねて物を書き透徹する法(二条)
- 7 堀田備中守書付写
- 8 亜墨利加使節御目見次第書(二十二条)
- 9 講武場海運稽古蘭語にて教授
- 10 来船六ボント并火薬車引渡
- 11 十二ボント車鉄輪仕込
- 12 下田詰亜墨利加官吏登城
- 13 ケヘル式万挺と觀光丸のドーコ買入
- 14 蘭人より上書式拾四ヶ条
- 15 イキリス蒸気船献上
- 16 阿州公船出来
- 17 仙台で三浦犬弥蒸気船出来
- 18 都下風聞書(二十五件)
- 19 時務策チヨボクレ
- 20 和蘭条約上長崎鎮台書(二十七条)
- 21 和蘭領事館肝要の事柄(三十六条)
- 22 備中宅にて亜墨利加使節申立趣(百七十条)
- 23 諸有司と亜墨利加使節對話書

五 おわりに

本稿では、村上範致古記録研究会で「村上範致聞見雑記」の輪読を続けながら、研究を活字化して公表する前段階として、村上範致と「村上範致聞見雑記」について概要をまとめることを目指した。

範致については、『田原町史 中巻』を基に、範致研究により寄与することを目指して略年譜を作成した。範致関係史料もなかなか全容が把握しにくいので、一覧表を作成した。交友関係については、書簡に限定して述べた。特に渡辺崋山の範致に対する期待の大きさが具体的にわかった。「村上範致聞見雑記」については、書誌事項をまとめた上で、目次項目を順次並べることにより、二冊から四冊までではあるが、情報内容の傾向を示すという目的は達成できたと思われる。海防に関連する事柄について、日本の主要な港での日本側の動向、異国の動向、幕府や朝廷の動きなど、具体的に書き留めていることがわかる。

本稿では村上範致について概要を報告することを目指したが、村上範致という人物は深くかつ広い。本稿で報告できたのはごく一部に過ぎない。渡辺崋山亡き後にこそ範致の真骨頂が発揮されると言えようが、それをバックアップした三宅友信との関わりについて触れられなかったのは残念であった。範致の門人帳に当たる史料もあるので、今後それらも含め、交友関係の研究を進めていきたい。

「村上範致聞見雑記」の「目次項目」は、紙面の関係で三冊分のみ掲載するに留まったが、五冊から八冊についても何らかの形で公表したい。「村上範致聞見雑記」の記事は、『大日本古文書』に掲載されたものと重なるものもあるが、それと比較してその記事の信憑性を確認することもできる。また、『大日本古文書 幕末外国関係文書』に掲載されていないような、体験に基づく記事や風聞なども多い。さらに、範致自身の見解も付されるようになり、範致の思いが伝わるような記載もある。今後の研究課題として取り組んでいきたい。

〔注〕

- (1) 渡辺崋山（一七九三—一八四二）田原藩士・家老。文人画家・蘭学者。江戸田原藩藩邸長屋に生まれる。名は定静。字は子安または伯登。通称は登。はじめ崋山と号し、のち崋山と改める。海外事情を研究し、その成果を世に出すが、これが幕府の忌むところとなり、天保十年（一八三九）投獄され（蚕社の獄）、田原蟄居となり天保十二年（一八四二）田原で自刃する。『田原町史 中巻』一〇四二—一〇六四頁、『日本近世人名辞典』竹内誠・深井雅海編、吉川弘文館、二〇〇五年、一一四六頁
- (2) 現田原市博物館
- (3) 『田原史（復刻版）』田原区編、平文社、一九七四年
- (4) 『田原町史 中巻』田原町文化財調査会編、田原町教育委員会、一九七五年、一〇七九—一〇八六頁
- (5) 『田原町博物館年報』第5号、田原町博物館、一九九九年、三六—四七頁
- (6) 『田原町史 中巻』一〇八五—一〇八六頁
- (7) 『由緒』村上財右衛門照員撰 文政二年（一八一九）
- (8) 『田原町史 中巻』六五七—六五八頁、八三五頁、一〇七九—一〇八六頁
- (9) 『田原町史 中巻』六五七—六五八頁、一〇七九—一〇八〇頁
- (10) 三宅友信（一八〇六—一八八六）田原藩八代藩主康友の子として江戸麹町田原藩上屋敷で生まれる。十九歳の頃より、崋山の指導を受け蘭学の研究を行うようになる。他藩より持参金付の養子を迎えるため嫡廢となり、隠居身分となる。その隠居料にて蘭書を購入し、友信が居住した菓鴨屋敷には蘭書が充満していたと言われる。『田原町史 中巻』一〇六五—一〇七〇頁
- (11) 高島秋帆（一七九八—一八六六）江戸時代後期の砲術家。長崎町年寄高島四郎兵衛の三男として長崎に生まれる。はじめ荻野流砲術を学んだが、のち出島の蘭人から西洋砲術を学びこれを高島流砲術とよんだ。高島流砲術の隆盛は、幕府内部の守旧派の忌むところとなり、中追放の判決を受け、武州岡部藩に預けられた。『日本近世人名辞典』竹内誠・深井雅海編、吉川弘文館、二〇〇五年、五四七—五四八頁
- (12) 真木定前（一七九七—一八四四）田原藩用人。藩主康直の世嗣擁立にかかり、遠州金谷にて藩主諫言の上書を残し切腹した。崋山の片腕と言われた人物であり、崋山から定前宛の書翰は、崋山研究の重要な史料となっている。『田原町史 中巻』一一〇三—一一一〇頁
- (13) 鈴木春山（一八〇一—一八四六）田原藩医。西洋兵学の研究者。田原藩藩校成章館教授。文政三年（一八二〇）から同六年（一八三三）まで長崎へ留学し西洋医学を学ぶ。訳書に「海上攻守略説」「三兵法活法」などがある。崋山との親交が深かった。『田原町史 中巻』一〇

八七～一〇九七頁〕

- (14) 別所興一 訳注『渡辺崋山書翰集』平凡社東洋文庫878、二〇一六年、四〇～四一、七二～七四、三八五～三八六頁
- (15) 別所『前掲書』一〇〇～一〇三、一三六～一三七、四〇一～四〇二頁
鈴木清節編『補訂 崋山全集』育生社、昭和一六年、二〇三～二〇七頁
- (16) 別所『前掲書』一一一～一二六、一四八～一五〇、四〇九～四一一頁
- (17) 別所『前掲書』三三二～三三五、三六三～三六五、四六一～四六二頁
鈴木編『前掲書』三〇一～三〇三、五五九～五六〇頁
- (18) 別所『前掲書』三五五、三七三～三七四、四七〇頁
- (19) 鈴木編『前掲書』五六一～五六二頁
- (20) 江川泉令（江川英龍）（一八〇一～一八五五）伊豆葦山に住む江戸幕府の世襲代官の家に生まれる。天保六年（一八三五）代官職をついで、家例により太郎左衛門と称する。はやくから海防問題に注意を払い、西洋事情や砲術を学び、田原藩士渡辺崋山に師事した。高島秋帆に西洋砲術を学び、英龍のもとには、幕臣川路聖謨や松代藩士佐久間象山が入門した。葦山郊外に反射炉を設けて鉄砲の鑄造に資した。
- 〔『日本近世人名辞典』、一三三二～一三三三頁〕
- (21) 『フルステケンキユンデ』は、三宅友信の「蘭書目録」（巴江神社蔵）に次のように載る書物だと考えられる。
- 「千八百三十四年 五十八頁

メルケス

一 フルステルキユンクスキユンスト 一冊

御要害結構之書

一 兩三分

「〔日本の夜明け展 ―崋山とその同志〕図録 四八頁）